

ステシコロスの『ゲリュオン譚』

丹下 和彦

1

現存するステシコロス Stesichoros の『ゲリュオン譚 *Geryoneis*』は大小 12 片の断片から成り立つ⁽¹⁾。うち 9 片はオクシュリンコス・パピルス、2 片はアテナイオス『食卓の賢人たち』に引用された引用断片、そして 1 片がストラボン『地誌』に引用された引用断片である。その総行数は 119 行（パピルスは判読できる行数のみ）である。原詩の行数は不明である⁽²⁾。残存する 119 行が原詩全体の中でどのような位置を占めるかも、必ずしも明確ではない。しかし 119 行を通読すれば詩に描かれた物語の凡そは想定できる。エリュテΙΑ島に棲む三頭三身の怪物ゲリュオンの所有する牛を盗みにやって来るヘラクレス、運命に立ち向かいヘラクレスと闘おうとするゲリュオン、牛飼仲間メノイティオスの忠告、母カリロエの心痛、両者の死闘、勝利者として凱旋するヘラクレス等々が、その凡その筋道である。

一方、この話はヘラクレスの 12 の功業の 10 番目としても、つとに知られている。ヘラクレスはエウリュステウス王に命じられていわゆる 12 の功業を行うが、その 10 番目がこのゲリュオンの牛盗みだった。ヘラクレスの英雄譚ともいふべき一連の伝承は、もちろんヘラクレスを主人公にしてその活躍ぶりを描くものである。ゲリュオンとの関わりでいえば、ヘラクレスはエリュテΙΑ島までゲリュオンの所有する牛を盗みに行き、争いとなり、そしてゲリュオンを斃すことになっている⁽³⁾。そこではヘラクレスが主役で、ゲリュオンは敵役である。ステシコロスはこの両者を逆転させて、ヘラクレスよりも討たれるゲリュオンのほうに焦点を合わせて描くことに意を注いだ。そのように思われる。いわば叙事詩の主題を抒情詩の手法で捉え直したということだろうか。その捉え直しの模様を、いくつかの断片に拠りながら跡付けてみたい。

2

まずは物語の場が示される。

断片 184(補遺 7)

音に聞くエリュテシアとほぼ向かい合った／タルテッソス／その無人の銀の床なす／流れのかたわら／岩の洞の中で⁽⁴⁾

(ストラボン『地誌』3.2.11)

ストラボンはこの引用にこう説明を加えている、「昔の人はバエティスのことをタルテッソスと、またガデイラとその付近の島のことをエリュテシアと呼んだようである。ステシコロスがゲリュオンの牛飼(エウリュティオン)について以下のようにその誕生の模様を語っているのも、このためのようである」と。

バエティスとはスペイン南部の河、現在のグアダルキビル河のことで、付近一帯は地下資源に富む。ガデイラは現カディス。エリュテシアはガデイラ付近のガデイラ島を指す。詩人はゲリュオンの棲む地、ヘラクレスが牛盗みにやって来る地、すなわちこの物語が展開する「場」を提示するために、ゲリュオンの牛飼エウリュティオンの誕生の地から歌い始める。

次も同じである。

補遺 8

深海の波濤を[超えて]彼らは／神々の美しき島へとやってきた、／ヘスペリデスが黄金の館／をもつところへと。

(オクシュリンコス・パピルス 2617fr.6)

「彼ら」は赤子のエウリュティオンとその母エリュテシアを指すと考えられる。その二人が海を渡って神々の美しき島エリュテシアへやってきた。エリュテシアはヘスペリデスの一人であるから、出産後の里帰り(とも言うべき)だったろう。そして成長したエウリュティオンはゲリュオンの牛飼となる。

このあと残存断片は物語の山場へと移って行く。エウリュティオンが護る主人ゲリュオンの牛を盗みに、ヘラクレスが遙々到来する。迎え撃とうとするゲリュオンに、同じエリュテシア島でハデスの牛を預かるメノイティオスが忠告を試みる(補遺 10)。それは文字に残っていないが、ヘラクレスに抵抗することの危険を強調するものであったと推定される。それにゲリュオンは以下のように応える。

補遺 11

その手で／彼（メノイティオス）に、不死なるクリュサオルと／カリロエの強き息子（ゲリュオン）が／答えて言うのに、

[エポドス]

冷たい死の話をもち出して／勇猛なるわが心を怯ませないでもらいたい。／また [（わたしに頼まないでほしい？）／というのは、もしわたしがオリュンポスの神々の／生活に与るがごとく、] 不死で老齢を知らぬ／そういう生れつきであったなら／結構なこと [／非難を [（耐え忍ぶのも？）

[ストロペ]

そして [／牛たちがわたしの小屋から外へ／駆り出されて行くのを見ること・・／だが、友よ、もしもわたしが [忌まわしい] 老年に／到達せねばならぬとすれば、／そして至福の神のもとを／遠く離れ、／はかない生命の者らに混じって生きねばならぬとすれば、／そのときは定められたものを [耐え忍ぶほうが／ずっとましなこと、 [死を逃れようとし／

[アンチストロペ]

愛しき子ら] や一族の上にこの先 [降りかかってくる／禍を避けようとはあがくよりは、／クリュサオルの息子たるこの身には、／どうかこれが至福の神々の／好むところとなりませぬように、／] わたしの牛たちについて／<一行欠損> [（ヘラクレス？）

（オクシュリンコス・パピルス 2617fr.13-15）

ゲリュオンは不死の身ではない。そして死は怖い。しかし死すべき身であるのならば、その身に定められた定めモルシモンには従わねばならない。ヘラクレスと闘って死ぬ定めならば、それを従容として受け入れようというのである。

補遺 12 はパピルスがかなり壊れている。その中に、「言うことをお聞きなさい、わが子よ」という一行がある。ゲリュオンの母カリロエが己が子に向けて

言った言葉である。

続く**補遺 13**はその内容である。

[エポドス]

]わたくし、不幸な女、子供の点／でも恵まれず、惨めな目に遭うばかり。
／ねえ、]ゲリュオンよ、お願いします、／もしもかつてわたしがおまえに乳房
を与え／<判読不能>／<欠損>／愛しい[母のかたわらで]おまえは喜んで
／・・・楽しい]食事の折りに。

[ストロペ]

(こう言って彼女は?) 香りの]よい長衣を・・・／<以下3行判読不能>
(オクシュリンコス・パピルス 2617ft.11)

カリロエは己の乳房に言及し母子の情愛をゲリュオンにも喚起して、ヘラクレスと一戦を交えようというゲリュオンの無謀な行為を止めようとしているのである。怪物にも母親はいる。その母親に子への情愛を語らせることによって、叙事詩的素材は抒情味を帯びてくる。このあたり、アキレウスとの一騎打ちに逸るヘクトルに胸をはだけて乳房を見せ、諫止しようとしたヘカベの姿に似る。

ただゲリュオンがなにゆえに死を賭してまでヘラクレスと闘おうとするのか、その理由は語られていない。いや、語られているのかもしれないが、わたしたちの手には残されていない。推測できるのは、それはアキレウスに対抗したヘクトルのように、個人的名誉のみならずその背後に民族的な威信をも賭けるといった体のもではなく、ひたすら無体な侵略者ヘラクレスに対してやむを得ず抵抗する者の矜持、それに尽きるだろうと思われる。補遺 11 のストロペに述べられているように、ゲリュオンは神ならぬ身の労多き長生よりも定められた分を甘受して死ぬことをよしとする。トロイアの戦場にあった戦士たちもそうした。アキレウスがその典型である。

いずれにせよ母カリロエの哀願それ自体が事態の悲惨な結末、すなわちゲリュオンの死を予感させる。そしてゲリュオンの死は神々のあいだでも取り上げられる。

補遺 14

[ストロペ]

そこで輝く眼のアテナが／馬を駆る強き心の叔父御に向い／意を尽くして
こう説いた、／さあ、以前に約束なされたことを／思い出して／望まれぬが
よい、]ゲリュオンを死から（救い出そうなどとは）・・・

（オクシュリンコス・パピルス 2617fr.3）

アテナの叔父御とはポセイドン。ポセイドンはゲリュオンの父クリュサオルの父、すなわちゲリュオンには祖父に当たる。その祖父ポセイドンの力をもつてしてもゲリュオンの定めは変更できない。神の世界においてもゲリュオンの死は予定事項なのである。

残された断片はここで一挙に決戦の場へ飛ぶ。

補遺 15

[ストロペ]

<2 行判読不能>／]二つ[/<欠損>／]心の内に彼（ヘラクレス）は決めた[/<判読不能>／はるかに有利だと[彼には思われた／]密かに戦いを仕掛けることが[

[アンチストロペ]

]強力な者に対して。／脇にかがんで]工夫を凝らした、／]辛い破滅を。／そして彼は]楯を[胸の]前に構えた。／こちら（ヘラクレス）は石で]／こめかみを打った。]すると頭から／たちまち大きな]／音をたてて]馬の毛の前立てのついた兜が[落ちた。／それはその]地上に[ある。／<以下2行欠損>

（オクシュリンコス・パピルス 2617fr. 4+5, col. i）

]忌まわしい／死という[終わりをもたらし、／頭上より[悲運を]引きめぐらし、／血と[]と胆汁・・・／すなわち光る頸もつ水蛇、人間の殺し手の／苦悶で汚された（矢で？）。無言のまま彼は／狡猾にも額に射ち込んだ。／それは肉と骨とを切り裂いた、／神の摂理にしたがって。／矢は頭の天辺に／まっすぐに止まり／真っ赤な鮮血で胸甲と／血まみれの四肢を

汚した。

[エポドス]

ゲリュオンの首はがくりと折れ曲がった。／さながら芥子の花が／そのたおやかな姿を害のうて／とつぜん花卉を打ち落とし [

(オクシュリンコス・パピルス 2617fr.4+5, coll. ii)

闘いの詳細はかならずしも明らかではない。しかしヘラクレスはどうやら不意打ちか何か、策略を用いたらしい。ストロペの最後の「密かに (*lathrai*) 戦いを仕掛ける」という詩句がそれを暗示する。アンチストロペ冒頭の「脇にかがんで] 工夫を凝らした、[/] 辛い破滅を」の主語はいずれだろうか。脈絡からしてこれもヘラクレスではあるまいか。詩人はここで攻勢に立つヘラクレスを、所与の伝承どおりに「怪物退治をするヘラクレス」を描いているのである。

ヘラクレスはまずゲリュオンのこめかみを石で打つ。装着していた兜が落ちる。次いで無防備となった前額部へ、おそらく至近距離から矢を射込む。「無言のまま *sigai*」に。この「無言のまま」という一語に、力において勝る者の傲岸さと冷徹さが象徴されている。彼は辺境に棲む異形の者を征服し、退治し、世に平安をもたらすという大義の具現者となるのである。矢はゲリュオンの肉と骨を切り裂く、「神の摂理にしたがって *daimonos aisai*」。ゲリュオンは殺されるべくして殺されるのである。

エポドスはゲリュオンの死の瞬間を鮮烈に捉えている。がくりと折れ曲がる頭を芥子の花の傾ぐさまに喩える描写は、わたしたちにはすでに馴染みのものである。

『イリアス』巻8.326-328行のそれである。ホメロスはこう歌う、「撃たれた男は、さながら庭先の芥子が、実も重く、春雨にも濡れて片方に頭を垂れる如く、兜の重みにがくりと頭を傾けた」(松平千秋訳)。プリアモスが一子、容姿端麗のゴルギュティオンが、ギリシア方の勇士テウクロスの放った矢で絶命する瞬間の描写である。

『ゲリュオン譚』を作詩するステシコロスの脳中に『イリアス』のこの詩句が一瞬過ぎたことは確実だろう。『イリアス』の詩人は春雨に煙る寓居の庭先の首を傾げる芥子の花を見、それを比喩として戦士の死の描写に使用し、そして成功した。それは絶命して頭を垂れる戦士と雨に打たれて萼ごと傾ぐ芥子の花の様相が、あるいは形状が似ているだけではない。双方相似していながら、

命の遣り取りの場に持ち込まれた春ののどかな庭先の風景が醸し出す異化効果が聴衆（読者）に強い、そして異常な心理的衝撃を与えるからである。それは凄絶な美ともいうべきものである。この美意識をステシコロスも弁えていて自作に取り入れたのである⁽⁶⁾。

ステシコロスのこのエポドスの場のテキストは完璧なものではない。パピルスが壊れている。それゆえホメロスの描写との相違あるいは類似を指摘することは容易ではない。言えることは現行の残存テキスト同士の比較に限られる。共通するのは芥子の花の描写である。しかしステシコロスには「庭」と「雨」が欠けている。その代わりに「花卉」が加えられている。ホメロスでは「兜の重みで頭が垂れた」とあるのに、ステシコロスではその前にすでに兜は打ち落とされている。ホメロスのゴルギュティオンはテウクロスに胸を射抜かれ、兜を着けたままで頭を垂れる。ステシコロスのゲリュオンはヘラクレスに先に石で兜を打ち落とされたあと、前額部を矢で射られて頭を垂れる。

ステシコロスはホメロスのこの直喩がじゅうぶんに効果的であることを知っていた。そしてそれを取り入れた自作を聞く聴衆（読む読者）が、ホメロスのこの場をあるいは想起するかもしれないことを計算に入れていた。そうやってよいだろう。さらに加えて容姿端麗なゴルギュティオンに使用された比喩を、三頭三身の異形の怪物に使用することによって喚起される違和感と、同時に異化効果ともいうべきものをも意図していた。そうやってよいように思われる。

補遺 16

]そして・・・[/二番目の[(頭部?)] / 棍棒[

三頭の怪物の二番目の頭部はヘラクレスの主武器である棍棒によって打ち倒される。三番目がどういう顛末で制覇されたかは不明（断片なし）だが、かくしてゲリュオンは英雄ヘラクレスによって退治されることになる。

補遺 17(断片 185) はすでに帰途に就いたヘラクレスを描く。

かくてヒュペリオンの強き息子が / 大洋を渡って / 聖なる暗き夜の底へ、 / 母のもと、契りおうた妻や / 愛しい子らのもとへ / 行き着かんものと / 黄金の酒杯に身を乗り入れたとき、 / ゼウスの子のほうは / 月桂樹が影を落とす

杜の中へと歩みを進めた。

(アテナイオス『食卓の賢人たち』11.469e)

ヒュペリオンの強き息子とは太陽神ヘリオスのこと。またゼウスの子とはヘラクレスを指す。ヘラクレスは、ヘリオスが夜間に大洋を渡るために使用する酒盃を借りて大陸からエリュテイア島へ渡った。いまゲリュオンを殺し、盗んだ牛を連れてふたたび大陸へ帰り着き、酒盃をヘリオスに返却したのである。

最後の2行は牛を追いつづ（？）帰途に着くヘラクレスの姿を描写したものとと思われるが、アテナイオスの引用はここまでで終わっていて、このあとのヘラクレスの行動は詳らかではない。しかしここが引用断片の怖いところで、後がないとなるとわたしたち読者はここに余情を感じてしまう。「杜の中へ歩みを進め」るヘラクレスの後ろ姿に、大仕事を終えたという安堵感と倒した相手の血の匂いとのないまぜにされたある種の虚しさを感じ取るのである。意気揚々たるさまは、どうもならないような気がする。戦う相手に私的な恨みをもたぬ、いわば仕事請負人たるにすぎぬ身であれば、それも自然なことではあるまいか。

『ゲリュオン譚』として残存する詩篇は次の断片で終わる。

補遺 19(断片181)

酒瓶三個分はたっぷり入る／酒盃を取り上げ、／口にあてがい呑み干した、
彼のためにとポロスが／水と和えて手渡した、その酒盃を。

(アテナイオス『食卓の賢人たち』11.499a-b)

本断片はこれまでのものと少々趣を異にする。エリュテイア島やゲリュオンとはほとんど関係のないことを述べているからである。この断片が本篇『ゲリュオン譚』に属するものとする、すでにエリュテイア島から引き上げてギリシアの地へ帰り着いたときの描写だろう。Campbell は、「ポロスの洞穴はアルカディアにある。おそらくヘラクレスは故地ティリュンスへ戻る途上である」と注している⁽⁶⁾。ポロスはケンタウロス族の一人で、なるほどその棲家はペロポネソス半島北部のアルカディアにあった。ここでは鯨飲馬食の徒ヘラクレスの本領が存分に発揮されている。飲食は日常性を表徴する最たるものであり、豊かなそれは生活の平安と逸楽を表す。そして飽食は滑稽に通じる。いまや血なまぐさい戦闘は過去のものとなり、ここにヘラクレスは稚気愛すべき好漢と

なって現前することになる。

3

上のようにギリシアへ帰り着いたヘラクレスを描くのは、この「ゲリュオンの牛盗み」を所与の伝承どおりに完結させたいとする詩人の意識が働いているせいかもしれない。しかしこれは課された難行を見事に成し遂げた勝利者成功者ヘラクレスのその事跡を寿ぐ一篇では、どうもないような気がする。最後の補遺 19 は、なるほど難行を仕遂げた後のヘラクレスの馳蕩たる姿を彷彿とさせるものではあるが、詩人の意図するところは実はそうした勝利者ヘラクレスを描くことにあるのではなく、所与の伝承をなぞりながら、しかしその題名のとおりヘラクレスに打ち倒される側の怪物ゲリュオンを描くことにあったのだと思われる。

メノイティオスの忠告に耳を傾けながらも、従容として運命に従おうとするゲリュオン（補遺 11）、哀願する母親カリロエ（補遺 12）を描出することは、所与の伝承の中に討たれる側の論理を埋め込むことを意識してのことだったと思われる。

戦闘の場面でもヘラクレスの狡知と冷酷さが強調され、ゲリュオンには辺境の怪物の属性と思われる野蛮性も凶暴性もなく、討たれる瞬間は芥子の花のシミレで表現され、その死は凄絶な美として捉えられている。どの民族の神話伝承も、正統を自認する勝者の立場から描かれるのがふつうである。その観点からすればゲリュオンは討たれるべき異端であり、退治されるべき怪物である。しかし本篇のゲリュオンは、怪物でありながら怪物ではない。単に退治されて終わる者ではない。彼から見れば不当な侵入者であるヘラクレスに対して、その存立権を主張する抵抗者でもあるのだ。ここにはヘラクレスの英雄行為とされるものを反対の極から捉えようとする詩人の視点が、明らかにある。それは討たれる側の論理の、また敗者の美学の追及とも言うべきものである。クインティリアヌスはその『弁論家の教育』の中でステシコロスの詩業について触れ、ステシコロスは「叙事詩の重みをリュラで支えた *epici carminis onera lyra sustinentem*」⁽⁷⁾ 詩人であるとした。本篇で描かれたゲリュオンの姿は、まさにこの評価の拠ってくるもの、その一つであったといえるのではないか。

注

- (1) Cf. M. Davies(ed.), *Poetarum Melicorum Graecorum Fragmenta*, vol. I. Oxford 1992.
- (2) Websterによれば、新発見のパピルス断片の余白に1300という数字が書き込まれていて、行数を示すものと考えられている。ただし行数の算定の仕方によって、これを半分の数に読み取る可能性があることも指摘されている。T. B. L. Webster, *The Greek Chorus*. Methuen 1970, p.76 参照。
- (3) J. G. Frazer, *Apollodorus The library*, 2,5, Loeb CL. 1995.
- (4) 各断片の訳は「アルクマン他『ギリシア合唱抒情詩集』」(丹下和彦訳)京都大学学術出版会、2002年所収の訳を使用する。
- (5) Leaf & Bayfieldの『イリアス』注釈(Leaf & Bayfield, *Homer Iliad*, I-XII. Macmillan 1962)は、このシミレの模倣例としてウエルギリウス『アエネイス』巻9、436-437行「あるいは芥子の花がたまたま雨に打たれて／支える首も疲れはて、がくりと頭を落とすときのように」を挙げているが、もちろんこのステシコロスの使用例のほうが時間的に早い。のみならず、ウエルギリウスの場合は『イリアス』を模した同じ戦闘の場での死(トロイア軍のエウリュアルスの)であるのに対し、ステシコロスの場合はヘラクレスの12の功業のうちの英雄対怪物の闘いというまったく異質な状況設定での死を扱っている。その点で独創性に富む模倣例といえる。先例を模倣踏襲しながら単なる模倣踏襲に終わっていない。そこには創意と工夫が窺える。その点ウエルギリウスの場合は芸がない。
- (6) D. A. Campbell, *Greek Lyric*, III. Loeb CL. 1991, p. 81.
- (7) Quint. *Inst. Or.* 10.1.62.